

火星開発計画～ネズミの手～

溝口怜

ただいまは 3031 年。ぼくが宇宙旅行の帰りに火星に墜落してから 5 年がたった。これは宇宙旅行というより宇宙逃亡というほうが正しいかもしれない。

あの頃の地球はとてもひどかった。宇宙にばらまかれた運用済みの衛星を壊そうとして誤って月を壊したり、地球温暖化の影響で北極がとけてなくなり、いくつもの島国がしずんでなくなってしまうなどの現象が起こっていた。しかも、その翌年には気温が 40 度上昇するという予測も出たため、人々は地下に避難していった。ぼくも避難しようとしたが、移動中に、地下へ通じる穴が固くってしまった。そこで、地上に残された人々は宇宙へと避難していくしかなかった。

ぼくは、自分のロケットに 10 年間分の食糧と 10 匹の動物、それに水と酸素を大量に詰め込んで宇宙空間へ飛び出していったわけだ。ロケットに積まれた荷物の中にねずみの巣があったとも知らずに…。

ぼくは宇宙で 5 年間過ごし、その後、地球の様子を見るために地球軌道に入った。すると衛星と間違われて地球から攻撃された。その攻撃をよけると、今度は軌道がそれて火星の軌道に入ってしまう、火星上に墜落してしまった。ロケットは大破し、通信用の機器類は壊れてしまったが、奇跡的に脱出シェルターに大きな損傷はなく、水や食料なども無事だった。

ここからぼくの火星での挑戦が始まった。まず手はじめに、ロケットの残骸と火星の岩石で「色々研究所」を作り、研究に必要な道具と塩、それに発電所を作った。その後、同様に「生き物研究所」を作り、様々な生き物を作った。なぜなら、ちょうど食料がなくなりかけていたからだ。持ってきた 10 匹の動物の遺伝子を操作して、30 匹ほど新種の生き物を作った。30 匹中、10 匹は変な生き物ができてしまったので、放して鑑賞用にした。そして 20 匹を食用とすることにし、「生き物飼育所」を作った。

ところが、観賞用にした 10 匹の生き物が凶暴性をもち、危険になってきたので、ぼくは透明で丈夫なパイプで囲まれた道を作って建物と建物の間をつないだ。

ある日、隕石が飛来してパイプの道に穴が開いてしまった。早く修復しないと危険な生き物が内部に侵入してきてしまう。しかしとても間に合いそうもない。その時だった。

「わたしたちが手伝いましょう」

どこからか声が聞こえてきた。振り返ると、そこには百匹ほどのネズミの親子がいた。

「あなたたちはどうしてここにいるのですか」

とぼくが聞くと、

「あなたのロケットの積み荷の中に入っていたのです。それより早く道を修復しましょう。」と言われた。ぼくは、

「はい」

と応えて、一緒に作業に取り組み始めた。修復作業は、ネズミたちとやると早く終わり、ぼくもネズミたちも無事で済んだ。ぼくが、

「あなたたちのおかげで早く修理することができました。何か御礼がしたいのですが。」というと、

「大丈夫ですよ、私たちもあなたに助けられたのですから。また手伝ってほしいことがあったら、いつでもよんでください。ではさようなら。」と走り去ってしまった。

その後、ぼくは「ロケット・衛星研究所」、「ロケット・衛星工場」、そして「ロケット発射場」を作った。ロケット打ち上げのための燃料には、火星上で見つけたガスを使った。そして、何度もロケット打ち上げを行い、少しずつ火星のデータを入手した。

地球帰還用のロケットは来年完成する予定だ。そのロケットには、冷たい空気を吹き出す岩を使って作った「空気冷却機」など、ぼくの発明品も載せるつもりだ。他には、もしもの時のために、空気を圧縮してカプセルにつめた爆弾も作った。

今は、もう一度ネズミの手も借りたいと思うくらいに忙しい。